総合優勝はカウカイアA

260人が出場

マリリアで第30回全伯親善GB大会

第30回全伯親善ゲートボール大会（ブラジルゲートボール連合主催、サンパウロ新聞社共催）が18、19両日、サンパウロ州（聖州）マリリア市のマリリア日系クラブ施設コートで開催された。同大会には地元聖州をはじめ、遠方からはペルナンブコ州など全伯から207チーム、総勢約120人が出場。照りつける太陽の下、真っ白なシャツに身を包んだ選手たちによる熱戦が繰り広げられ、試合の中で交流を深めた。対戦の結果、銀組（年齢制限なし）はカウカイアA、金組（60歳以上）はサンジョゼ・ドス・カンポス、ダイヤモンド組（72歳以上）はウルマが、それぞれ優勝を飾った。総合優勝には、銀組のカウカイアAが輝いた。

同地での全伯大会開催は今年で2回目。18日午前8時から行われた開会式では、新宅義美大会実行委員長が開会宣言し、飯星ワルテル下議による始球式の後、競技が開始された。

同大会に最高齢での参加はツッパンチームの上野末夫さん（97）。1930年に広島県から渡伯し、綿花栽培などに従事した後、老後はゲートボールを楽しんでいるという。開会式では、他の高齢の選手たちとともに表彰され、記念品が手渡された。

18日は27の各コートに7、8チームずつ分かれ予選リーグが、翌19日に決勝トーナメントが行われた。決勝トーナメントに入るとプレーはさらに白熱し、各コートからは時折歓声が上がった。

野球場を利用したコートは、選手たちが普段練習している専用コートと異なり凸凹しているために、苦戦を強いられたチームが多かった。ペルナンブコ州から来場したレシフェチームの実村春美さん（74、2世）は、「いつもと違う力加減に慣れるまでに時間がかかってしまった」と、直前の試合を1点差で逃がしたことを残念がっていた。

同大会の運営ボランティアには、マリリア日系文化体育協会婦人部や運動部員など約100人が協力した。婦人部は両日、早朝6時に集まって900食近くを準備し、選手たちやその家族のお腹を満たした。

大会は予定通り19日夕方に終了。表彰、閉会式を終え、参加者はそれぞれ帰途へ就いた。

銀組及び総合優勝のカウカイアA

金組優勝のサンジョゼ

ダイヤ組優勝のウルマ

大会結果は次の通り。総合優勝＝カウカイアA。

【銀組】優勝＝カウカイアA、2位＝アリアンサ、3位＝イビポランB、リノーポリス。

【金組】優勝＝サンジョゼ・ドス・カンポス、2位＝東山、3位＝カートカチンス州から参加したパルマスチームは、飛行機を使って来場した。昨年5月にトカチンス文協会館裏にゲートボールコートを施設し、同9月から本格的に活動を開始した。

山田氏、生田氏らが訪日

ベレン総領事館問題で陳情

【一部既報】伯日国会議員連盟の会長だった西森ルイス連邦下院議員が辞任のあいさつのために24日から訪日するにあたり、飯星ワルテル下院議員と、在ベレン総領事館廃止問題陳情を目的にパラー日系商工会議所の山田フェルナンド会頭と生田勇治汎アマゾニア日伯協会会長も同行することが決定した。

一行は27日か28日に麻生太郎副総理と懇談する予定で、その際に改めて在ベレン総領事館の廃止問題について陳情を行う考えだ。

同問題は日本の外務省が来年、南スーダンとアイスランドに大使館を新設することから在ベレン総領事館を「出張駐在官事務所」に格下げし、浮いた予算を二つの大使館に振り分けるもの。

ベレン日系社会ではこれまで、日系6団体の代表者たちの署名で、直接麻生副総理あてに作成された嘆願書などを送付するなど反対運動を展開している。

しかし、現状では日本政府、与党の了解の下、衆議院の外務委員会で法案名「在外公館の名称及び位置並びに在外公館に勤務する外務公務員の給与に関する法律の一部を改正する法律案」が今年3月22日に可決。同日、衆議院本会議でも全会一致で可決された。

救済会「憩の園」

第1回手

憩の園（吉岡黎明会長）は26時、グ内Re cis巻き上とい平成24年（2012年）現在の統計では24・1%である。約4人に1人が高齢者。これが日本の現状だ。

しかも平成22年（10年）実施の国勢調査によると日本の全世帯5195万5504のうち、約3割の1678万5000世帯が単身世帯である。そして、さらにその約3割の479万768世帯が65歳以上の単身世帯。65歳以上の夫婦2人だけの世帯は986万4505世帯にもなる。

単身もしくは夫婦だけの高齢世帯では、自分が死ぬ時に家族や親類等に迷惑を掛けたくない、と思っている人が多いようだ。そのため、自分の終えんを事細かに指示しておきたい（＝終活をしておきたい）、という心理があるのかもしれない。

だが、終活をするためには認知症になったり、例えばがんが進行して、判断力が低下したりしてからでは遅い。家のどこに保管したか分からないような各種の古い書類を探し出してエンディングノートに記入するには体力も必要だ。

先ほど、日本は超高齢社会であると述べたが、実際には65～70歳はまだまだ元気な人が多い。そして、時間に余裕のある人が大多数である。「元気で時間がある」という社会階層は、かつては存在しなかった。

この人たちこそ、終活人気を支えている人々である。

では、これらの「新しい高齢者」が求める葬祭の形とはどんなものであろうか。ちなみに、私も本年4月、終活カウンセラー初級に認定された。僧侶、終活カウンセラー、そして長年葬儀業界の業界誌で記者をした者の立場から考えてみたい。（つづく、太田宏人）

第3部「老い」について考える⑧

日本のエンディング風景

「終活」への高い注目

第1部、第2部ではブラジル国内の孤老問題、日系福祉施設の現状に触れてきた。第3部では、元ペルー新報編集長で現在は日本に在住し、雑誌「SOGI」のライターとして活動する一方、曹洞宗僧侶でもある太田宏人氏に「日本のエンディング風景」を紹介してもらう。（編集部）

現在の日本で就活といえば、主に大学生による就職活動の略語だ。ところが最近では、「終」活という言葉のほうがメディアをにぎわしている。

終活とは、一般社団法人「終活カウンセラー協会」の代表理事を務める武藤頼胡さんによると「これまでの人生を振り返り、自分の終えんを見つめ、今、そしてこれからの人生をよりよく生きるための活動」。つまり、「死ぬための準備」ではない。この前向きな姿勢に共感し、40～50代にも終活は浸透し始めている。人生のエンディングに関係する生命保険、尊厳死、遺言、遺産、葬儀、埋葬法や墓などの死後のこと、遺品整理、家系図つくりなどを学ぶ終活セミナーは、各地で人気だ。

終活のツール（道具）として取り上げられることが多い「エンディングノート」の認知度も高まり、30～40代の女性向けにデザインされたエンディングノート「Never Ending Note～未来に残すエンディングノート～」（集英社／2012年10月発売）も好調に売れている。

今年3月30日に大阪で行われた終活カウンセラー初級検定で。講師は武藤頼胡さん（終活カウンセラー協会提供）

エンディングノートは遺言とは違い、法的効力はない。だが、自分の意思（遺志）を気軽に表明しておけるだけではなく、人生を振り返りながら、生命保険の記録や葬儀に（どんな関係性から）誰を呼ぶのか、形見分けをどうするのかなどを記入できるのが特徴だ。前出の武藤さんは、「人生の棚卸しノート」と表現している。

◆終活がなぜ人気なのか

終活人気の背景には、日本が超高齢社会であることが関係している。WHO（世界保健機関）によれば、超高齢社会とは65歳以上の人口が21%以上という状態である。